

ミャンマーでの車いす引き渡し報告

95 台の車椅子がミャンマー政府の保健省の傘下の 3 か所の病院に送られた。
ミャンマーには今回で 4 回目の寄贈であり、合計台数は 3 1 5 台となった。

国立リハビリ病院、ヤンゴン	35 台
ヤンキン子ども病院、ヤンゴン	30 台
マンダレー総合病院、マンダレー	30 台

ヤンゴン市内の 2 か所の病院での引き渡し式が 2 月 2 7, 2 8 両日に行われ、当会から小田謙介理事と相模女子大チームの小泉京美教授と学生会員 1 2 名が出席した。

国立リハビリ病院 (National Rehabilitation Hospital NRH)

2018 年 2 月 27 日

主な出席者 : Dr. Nu Nu Kyi, 保健省 Medical Superintendent
Dr. Chamaiparn Santikarn, Medical Officer,
World Health Organization (WHO)
Dr. Khin Thida Aung, 国立リハビリ病院 Medical Superintendent,
当会の小田謙介理事と相模女子大学小泉京美教授と 1 2 名の学生会員

出席者は、今回車椅子を受け取った子ども代表 9 名と家族、そして前回 2016 年に車椅子を受け取った 7 組の子どもと家族と NRH の関係者など約 7 0 名。

NRH には 4 回目で合計 1 6 5 台の寄贈となった。

保健省 Dr. Nu Nu Kyi が過去 4 回の寄贈数を挙げて感謝の言葉を述べるとともに「特に地方では車椅子を手に入れることが不可能」と引き続いての寄贈への要望があった。

小田理事のスピーチでは、日本の子供たちの家族（特に母親）の協力が大きいことに触れ、受け取った車椅子を家族の一人だと考えて大切に活用してほしいことを強調し、車椅子がミャンマーと日本の子供たちと家族との架け橋を築く役割をすることを希望していると述べた。



継続した寄贈への感謝の言葉を述べる保健省の
Dr. Nu Nu Kyi



「車椅子を家族の一人と思って大切に活用してほしい」
と述べる小田理事

相模女子大チームのプレゼンテーション

相模女子大チームの学生が「当会の日本での車椅子活動」の紹介のプレゼンテーションを行った。子どもの家族を始め出席者全員が理解できるように、英語のプレゼンテーションがミャンマー語に翻訳された。

プレゼンテーションの最後に日本の子どもの二人の母親からの「ミャンマーの皆様へ」の手紙のミャンマー語の翻訳が紹介された。時折うなずきながらの真剣に聞き入る出席者の様子が見受けられた。



プレゼンテーションを真剣に聞き入る出席者



続いて、最初の寄贈から関わってくれている Dr. Khin Thida Aung がこれまでの NRH への寄贈に対する感謝の言葉を述べた。



保健省からの感謝状（Certificate of Appreciation）が小田理事に手渡され、続いて相模チームから手作りの桜の花びらに様々なメッセージを記したシートと折り鶴がNRHに手渡された。



車椅子引き渡し

9人子ども達代表と家族に車椅子が引き渡された。



子ども達との交流

当初予定していた前回車椅子を受け取った子どもの自宅訪問は大人数での訪問による家族の負担と交通渋滞を考慮して取りやめ、子ども達の病院訪問を受けての交流となった。



嬉しい再会

前回2016年に車椅子を受け取った7組の家族が病院に来てくれた。

NRHのスタッフの通訳で車椅子を受け取ってからの生活の変化についてたずねると全員が生活が良い方に変化をしたとの答えであった。

具体的には「動物園に連れて行けた」「外に出て近所の子供たちが遊んでいるのを見ることが出来て、友達が増えて笑う事が多くなった」「学校に行けるようになった」などの言葉を聞くことが出来た。また、車椅子が故障したらどうしているか、の質問には一斉に「まだ故障していない」との返事。大切に使ってくれているのが有難い。



前回会った父兄との再会を喜ぶ小田理事

リハビリ治療中の子ども達

子どものリハビリセンターでは専門家の指導のもと子ども達がリハビリ治療を受けていた。
ある母親の話では、子どもが外に出られるからリハビリ治療で病院に来るのを楽しみにしているとのこと。
子ども達に病院での治療も外の世界に触れるかけがえのない機会となっている





ヤンキン子ども病院 (Yankin Children Hospital YKCH)

2018年2月28日

主な出席者 : Dr. Nu Nu Kyi, 保健省 Medical Superintendent
Dr. Kyaw Zin Wai, ヤンキン子ども病院 Consultant Paediatrician
Professor Khin Nyo Thein, ヤンキン子ども病院 Head/Senior Consultant
当会の小田謙介理事と相模女子大学小泉京美教授と12名の学生会員

ヤンキン子ども病院には今回初めて30台の寄贈であり、車椅子を受け取った5名の子ども達と父兄、病院関係者など約40名が出席。

主賓の保健省の Dr. Nu Nu Kyi は前日の NRH の式に出席し、当初はヤンキン子ども病院での出席は予定されていなかったが、「大事なプロジェクトだから」と急きょ予定を変更して出席となった。前日も式後の話し合いの中で、「日本からの車椅子を港から直接地方に運送するにはどのような物流が可能か」との具体的な質問を小田理事に訊ねるなど関心は高く、継続した寄贈への要望も大きい。



保健省の Dr. Nu Nu Kyi



YKCH の Dr. Khin Nyo Thein



小田理事のスピーチ

相模女子大チームのプレゼンテーション

小田理事のスピーチに続いて前日の NRH と同様に相模女子チームによる活動紹介のプレゼンテーション、そして二人の母親からの手紙をミャンマー語で紹介した。

NRH と異なり、初めての寄贈であり、初めての活動紹介だったので出席者はプレゼンテーションの内容に興味を持っていて、我々の窓口となっていた Dr. Kyaw Zin Wai が「日本での活動は想像していたよりプロフェッショナルだ」とコメントしていた。



手作りの桜の花びらメッセージと
折り鶴を手渡す



感謝状 (Certification of Appreciation) と記念品を受け取る。

子ども達代表へ車いす引き渡し

出席した5名の子ども達代表に車椅子が引き渡された。
児童施設から来ている女兒や、家族は助かっているが、まだ車椅子に慣れないのでいつも嫌がっている男児もいるとのこと。



ヤンキン子ども病院内訪問

贈呈式に先立って、Dr. Kyaw Zin Wai が病院内を案内してくれた。

同病院にはヤンゴン市内のみならず、遠く離れた地域からも子ども達が来院しており、治療を受けている間家族は病院に泊まり込んでいる。冬の寒さには縁のない国だとは言え、敷地内の建物の外で寝起きをしている家族には厳しい生活となっている。

今回車椅子を受け取った二人の子ども達を病室に訪ねた。



9歳の男児は脊髄と近くの骨が損傷していて手足が不自由。リハビリで少しずつは良くなっているがまだ十分に動かせない。車椅子で外出が楽になったとは母親の言葉。



6歳の男児は体に震えやツツパリの症状がある。

この二人には車椅子が配布されたが、同じ病室にいる約10名の子ども達の中ではこの二人のみ。訪問していて周りの子ども達の家族の目がつい気になってしまった。

その他の病室も訪問したが、脳の専門医の話では日本では死語となっている「日本脳炎」に罹る子ども達が少なくない、とのこと。ただし、蚊の媒介が原因ではないとのこと。

廊下にベッドが並ぶ



規模の大きな病院ではあるが、ミャンマー各地から訪れる患者で病室は満杯。
病室外の廊下にベッドを並べて子ども達が横になっている。
ただ、通りかかった我々を見て笑顔を見せてくれるのが救い。
撮っていいか、と遠慮がちに聞くと一斉に笑顔でピースサインを出してくれたのが有難かった。

継続した車椅子寄贈の要望

国立リハビリ病院での式後、来賓として出席していた保健省のドクターやWHOのドクターから「地方への車椅子を配布したい」と今後の寄贈の可能性に関する質問を受けた。今回訪問はしなかったがマンダレー総合病院に30台を配布しているが、それらの都市部からさらに離れた地域での車椅子の必要性がより高いとの判断をしている。
当日は具体的なデータは持ち合わせていなかったが、かなり真剣に物流関連の質問も受け、思わぬ（かつ楽しい）会議の場となった。
ただ、現在のヤンゴン両病院でも不足している状況でもあり、次回の寄贈計画の折には事前に十分な検討が必要となる。保健省が配布先決定のイニシアティブを取るかもしれない。



今回出会った子ども達と家族の皆さん

国立リハビリ病院







親子3人おそろいの服でオシャレ



子どもの額にハートマークのミャンマーの化粧「タナカ」

ヤンキン子ども病院

